The Museum of Plastic Nation.

Statement
Goro Murayama
2018

　プラスチックは少年に似ている。マテリアルとしてのプラスチックの純粋な美しさだけでなく、可塑的で形成力のあるその性質もまた、世界における＜少年＞という存在の化身のようだ。今や私たちの世界年代は「人新世 Anthropocene」と呼ばれ、無数のプラスチック-少年たちが打ち捨てられ堆積する事態となった。少年が、元の可塑性を失って、それこそペットボトルやビニール袋などといった特定の機能へと膠着することで、私たちは世界から少年を追いやっている。少年に社会における役割を与え、ひたすら大人にしてきた。プラスチックを隷属させることを止めなけらば、真に可塑的で形成力のある水水しい感性は失われ、少年らしい創造力は世界から枯渇してしまうだろう。プラスチックは美しい。この純粋なコンセプトを、私はプラスチック・ペイントの探求をとおして表現したい。
　絵画のマテリアルに用いられるアクリリックペイントもまた、プラスチックの一種である。日本のアクリル絵具は、その保存性の観点から世界的にも非常に評価が高い。水溶性だが乾燥すると水に溶けないアクリル絵具の性質は、人間の感性時間との同期性が高く、即興的な制作行為を媒介するのに優れている。アクリル絵具は、油彩の代用ではない。アクリル絵具は、画家をよりプラスチックにするのだ。

　少年のように絵を描く、否、少年になり絵を描く。少年になること。アーティストとしての身構えを外して、無礼に、軽く、清々しく、友と歩き、冒険をする。プラスチックになるとは、私たちが少年になることをとおして実現されるはずだ。本展では、私の独作に加え、ゲストアーティストに有賀慎吾を迎えての共作アクリリックペインティング（management shaman: Nao Horomura）も交えて展示する。友との感性的なカップリングや音楽との共感覚を道具立てに、少年らしさを失わない経験の仕方を提示してみせよう。独作と共作を併せてみることで、作者の制作における可塑性plasticallyを感受できるはずだ。
　大量消費産業は、プラスチックの物性ほどにはプラスチックではなかった。私たちは、少年を大人にし、酷使してきたのだ。現代は、これに加えてAIをもまた社会の役に立つ大人に仕立てようと人間は目論んでいる。物性的少年と情報的少年。これらのイマジネーションを取り戻し、来たるべき未来をPlastic Nationと構想する、本展はその第一幕となる。